

機関番号：12601

研究種目：若手研究 (B)

研究期間：2009 ～ 2010

課題番号：21720283

研究課題名 (和文) 近世城下町の誕生と展開に関する考古学的研究

研究課題名 (英文) Archaeological study on birth and development of castle towns at early modern age and Edo period.

研究代表者

追川 吉生 (YOSHIO OIKAWA )

東京大学・キャンパス計画室・助手

研究者番号：60313178

研究成果の概要 (和文)：近世城下町の成立期の様相を考古学的に考察した。遺構としては庭園を、遺物としては貿易陶磁器の組成を分析対象とし、中世城下町と比較を試みた。その結果、近世初頭の武家儀礼が、近世城下町の形成に少なからぬ影響を与えていたことが明らかになった。

研究成果の概要 (英文)：The aspect of the organized period of the castle town was considered in archaeology at the early modern age. The composition of the trade pottery was analyzed. As a result, it was clarified that the samurai etiquette in the early modern age had had a lot of influences on the castle town formation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009 年度	900,000	270,000	1,170,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
年度			
総計	1,700,000	510,000	2,210,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：歴史考古学

## 1. 研究開始当初の背景

日本の近世城下町の大部分は、江戸幕府成立後に造られたものである。これは現代日本の都市が、近世城下町から発展したものである点と対照的である。

幕藩体制に組み込まれた近世大名にとって、既存の中世城下町を発展させるのではなく、新たに城下町を開発する背景を探ることで、近世城下町や近代都市の本質の一端を明らかにすることができると思われた。

## 2. 研究の目的

1 で述べたとおり、現在の都市の大部分は、江戸時代に成立した城下町が発展したものである。なかでも江戸は 18 世紀半ばには 100 万人の人口を擁するまでに発展した。この規模は日本国内の都市と比較して最大であるばかりでなく、当時の諸外国の都市と比較しても、北京に次ぐ規模であった。しかし都市のなりたちを考えれば、江戸は徳川家康が領地として拝領してから急速に都市化を遂げたことが特徴として挙げられる。

こうした事例は江戸だけでなく、仙台、金沢、高知など、全国の近世城下町でも見受け

られる（例外として中世から継続して発展した都市は大阪や京都などごく少数である）。

このことは我が国の都市が、中世城下町よりも近世城下町とより親和性が高いことを示している。本研究ではこうした点に着目して、近世城下町の発生と展開の様相を考古学的視点から考察を試みた。

### 3. 研究の方法

考古学的調査が行われている城下町を対象とする。なかでも江戸は、都心の開発にともなう発掘調査によって、近世城下町の中でも最も考古学的調査が蓄積されている都市である。他の城下町では、近世城郭のみを発掘調査の対象とするケースが多い。そのため、城下町の調査事例のある金沢、高知、仙台を対象とした。

### 4. 研究成果

#### (1) 城下町における儀礼装置としての庭園

中世城下町の構造を模式的に捉えるならば、館と山城という二重構造が核となる。そして城下町は前者の館を中心に、家臣や町人地、寺院、市が集まることで展開した。館は戦国大名の住まいであるが、周囲を堀と土塁に囲まれた防禦性が高いもので、これは広義の城であり、平時の城と戦時の城と置き換えることができる。

一方、近世城下町では城は付随的なものとなり、政庁としての御殿が都市の中心となって展開していく。

この両者の違いについて、館・御殿内の庭園のあり方と、城下町内に設けられた大名墓のあり方を通して比較検討を試みた。

近世城下町の庭園（武家屋敷に設けられた庭園も構成要素は共通するが、ここでは江戸の大名屋敷や、各地の城内に設けられた大名庭園を中心に考察した）では、人口的な水路・山路が築かれていることが発掘調査によって明らかにされている。江戸に大名屋敷内の庭園では、こうした整備が将軍御成や、大名同士の交誼の場としての役割を担ったことだということがわかるが、金沢城など近世城下町の調査によっても、上記のような土木工事によって庭園が整備されていることが明らかになった。

国元では将軍の御成や大名同士の相互訪問としての役割はないが、大名と家臣間での身分秩序を確認する儀礼の場となった。

一方、中世城下町の庭園では、館を囲む堀から水を引き込む工事や、築山は認められるが、近世の庭園ほどの土木工事は見られない。これは庭園が、近世庭園のような身分関係を明らかにするような儀礼的な装置としての役割が希薄であったことを反映したものである。

#### (2) 近世城下町成立期の遺物組成

中世城下町、近世城下町いずれにおいても、中国・朝鮮・東南アジアで生産された陶磁器が出土する。これらの陶磁器は主として日常生活の場に用いられており、碗、皿のほか、甕や壺といった容器も多量に出土している。

しかし中世城下町では特に城や館からの出土品に、一定の規範によって書院に飾りつけられる瓶や盤、あるいは碗や茶入といった茶の湯道具が含まれている。これらは武家儀礼と深い関係を有しており、城下町特有の遺物組成と位置づけることができる。

近世城下町では、こうした遺物組成が大きく変わる。一つは国産磁器の生産と流通が始まり、日常道具が輸入品から国産品に置き換わったことである。しかし中世城下町で認められた武家儀礼に伴う陶磁器には、依然として輸入品が認められる。近世城下町で輸入陶磁器がほぼ見られなくなるのは、城下町成立期である16世紀末から17世紀初頭から半世紀ほど遅れた17世紀半ばである。

その背景には陶磁器の一大生産地である中国における明末から清への政変や、解禁政策などの要因もあるが、(1)同様に、近世城下町成立期に行われた武家儀礼が、半世紀を経てやや必要性が低下したことも一因であると考えられる。

### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔その他〕

社会への成果公開

「発掘にみる江戸城ものがたり」、『歴史REAL』第3号、洋泉社、2011年、14頁

### 6. 研究組織

#### (1) 研究代表者

追川 吉生 (YOSHIO OIKAWA)

東京大学・キャンパス計画室・助手

研究者番号：60313178